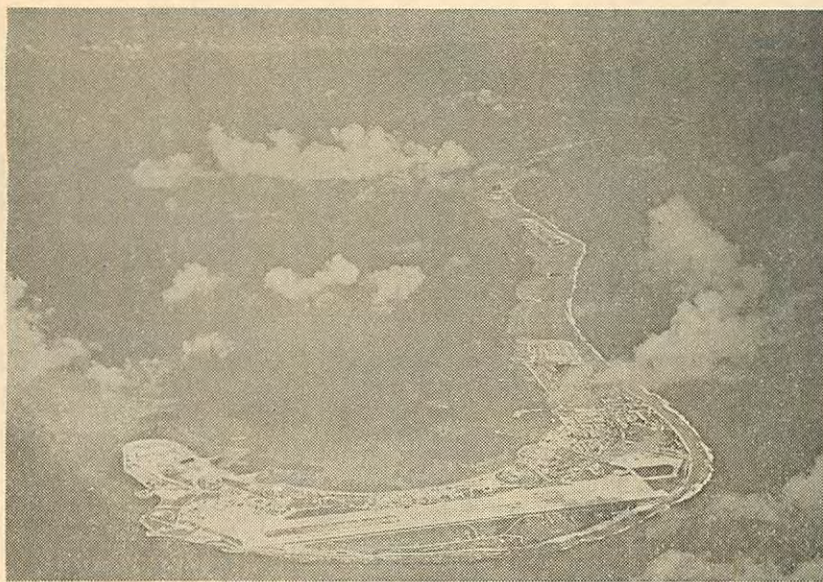




マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)
 郵便番号 154
 世田谷区野沢3-11-3
 電話 東京 (424) 4300
 振替口座東京 0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗丕



クエゼリン本島

偶 感

私は時折りある一つの情景を思い出します。昭和50年8月第一回クエゼリン現地慰霊の為マジユロを訪れた時のことです。私共全員が野外パーティーに招かれて交歓の打合せの際サブロウさんから「始めに君が代」を歌いましょう」と言われました。日本を遠く離れた絶海の孤島で、島の方々約80名と私共37名合計120名の君が代の大合唱は暮れかかった南海の空に轟きわたり、打寄せる波も暫し音を止めるかに覚ええました。この島での君が代は何十年ぶりかと思ひ、附近の島や海域で散華された英霊に届けと許り歌いました。

本会が発足したのは昭和38年ですから、もう17年経ちました。この間歴代会長の御熱意と浮田現会長の超人的な御努力が実を結んで、他のこの種団体に例を見ない実績をあげました。クエゼリン島の慰霊碑建立も、現地軍官民との友好関係も、会員相互の友愛も本会ならではの業績だと思います。

しかし、戦没者の慰霊を本旨とする会の役目はまだ終わっていません。会員の年齢を考へて前途に一抹の淋しさを感じておりました所、この程「環礁」編集のため会及び浮田会長に寄せられた皆様のお便りを拝見して大きな感動を覚えられました。それは私の杞憂を完全に吹き飛ばし前途に光明を与えてくれ、力強い大河の流れを感じたからです。

マジユロの山村 要様は、『次の世代の人々も日本に好意を持ってゐる。貴会の皆様と仲よくやってゆくことを望んでいる』と。小田桐温子様は『自分達の世代が遺族会を引ついでゆかねば』と、内山浅子様のお嬢様は『自分に出来ることがあればお手伝いを』と。それぞれ異口同音に申しておられます。山口良二様はたった一人でマジユロとクエゼリンに行つて来ました。現地の方々と心の通う文通を活発にされている方が沢山あります。これらの皆様が本部の青壮年役員と手を取り合つて会の業績を伸展させてゆくことこそ英霊をお慰めする唯一の道と考へる次第です。

副会長 佐藤宗丕

目 次

偶 感	佐藤 宗丕	1
五五年現地慰霊団の足跡		
会長	浮田 信家	2
クエゼリン墓参に参加して		
奥田	和広	3
山田	道子	4
内山	浅子	5
萩原	八重子	5
小田	桐温子	6
山本	允子	7
土屋	まさ子	7
山本	隆一郎	7
お世話になった方々		
会長	浮田 信家	7
現地の便り		
マジユロ	山村 要	8
会員の便り	内山 浅子	9
マジユロ・クエゼリン一人旅	山口 裕子	9
戦地からの便り	林 春千代	10
五六年二月六日の御案内		11
寄付者芳名		11
事務局だより		12

五五年現地慰霊団の足跡

会長 浮田信家

前号で、希望者に現地慰霊のお世話をする旨発表したところ、マーシャルに八名、ギルバートに四名の申込みがありました。その後ギルバートの方々は夫々の都合によって取止めになりました。今年は、マーシャル班だけになりました。今年二月、クエゼリンの司令官に墓参の許可を申請しましたが回答がなく、大里夫人の手紙に新司令官ウィッテリー陸軍大佐は殿しい方のようにだとありましたので、今年はダメかと半ば諦めていたところ、6月23日にクエゼ



墓前にて一行八名

リンのホーランド憲兵隊長から一通の書状が届きました。その内容は、一、八名の墓参は差支えない。二、クエゼリンに宿泊すること、食事の提供もよろしい。三、クエゼリンでの支払のため米貨を持参されたい。四、わからないことがあれば、座間基地(神奈川県)のパーター氏に聞いて下さい。便宜を計ってくれる筈です。

その後御指示通り座間基地のパーター様を数度訪問して助言を頂き、すべての準備が整いました。

行動の概要

〔参加者の手記から抽出しました〕

第一日 55・7・30(水)

午後3時九段会館新館に集合。浮田会長の御案内により靖国神社の宝物遺品館で、クエゼリン慰霊碑の副碑を拝観し、昇殿参拝、九段会館で説明会(交通公社西田社員同席)

第二日 55・7・31(木)

06・30箱崎シティセンター集合、リムジンバスで成田へ。

09・30浮田会長と西田氏に見送られコンチネンタル644便で出発。サイパン、グアム、トラック、ポナ

鉄道のあったところ



ベを経て、22・46(現地時間)クエゼリン着。空港には深夜にかかわらず、アンブローズ様(憲兵隊長の代理)大里様ご夫妻、中田様、ラッセル・ウィンフィールド様(空港の出入国責任者)が出迎えて下さり、直ちに宿舎のクエゼリン、ロッヂに誘導される。

第三日 55・8・1(金)

猛烈なスコールのため墓参を午後に変更し、大里様の車で島内一巡。グロバル社のクエゼリン支配人ドン・マッカーフィー様に御挨拶に伺う。

13・30墓参、雨に洗われた墓苑が一際清浄に、南の太陽に輝くばかり。一同感激のうち心静かにお詣りをする。

後、中田様も加って島内一巡。夜は、

クラブで晩餐会(ホーランド憲兵隊長ご夫妻、大里様ご夫妻、アンブローズ様ご夫妻、中田様、徳原様とも)

第四日 55・8・2(土)

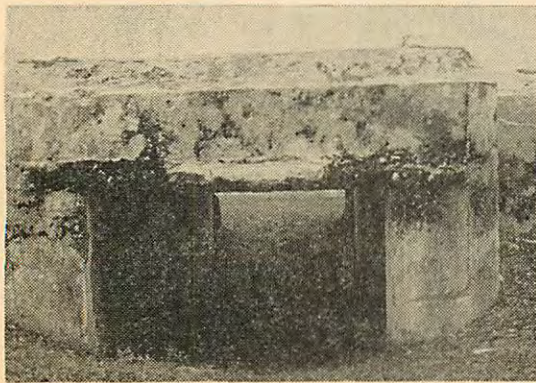
08・30司令部へウィッテリー司令官訪問。憲兵隊長より「秋葉山丸」より引揚げられた遺品(ビン12本)を頂く

09・00墓参。自由散歩。

13・00憲兵隊長のすすめにより慰霊碑の前で記念撮影。カメラマンは航空写真担当のジャクソン様。

14・00・15・30定期船でエビゼ島へ(上陸はせず)夜、大里様宅で夕食の招待をうける。(アンブローズ様ご夫妻、中田様も)

第五日 55・8・3(日)



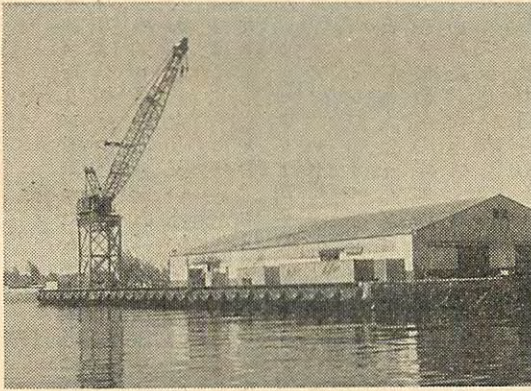
西部トーチカ

朝食後、浜辺で貝や砂を採取する。広場で島民の踊りを見る。たまたま島の住民が、司令官夫妻に踊りを見せに来たものに便乗ご相伴。

踊りの終わったところで、司令官夫妻、酋長夫妻等と記念撮影の榮に浴す。お別れの墓参をして出国手続き。

空港には、アンブローズ様ご夫妻、大里様ご夫妻、中田様、ジャクソン様が見送りに来て下さった。

13・11クエゼリン離陸。成田に降り立ったのは19・44であった。



日本軍の残した棧橋



クエゼリン墓参に参加して

参加者全員から夫々詳細な記録や感想文を沢山頂きました。行程については皆同じですから前掲の行動の概要にまとめさせて頂きました。

クエゼリンを現地の人々は、クワジャレシと発音し、エビゼ島はイバイ島と呼ばれていますが、戦時中日本ではクエゼリン、エビゼ島と呼んでおり、公刊書もそのようになっていますので本会は旧によって表記しております。この度の参加者の手記もそのように書き直させて頂きましたので御了承下さい。 — 編集子 —

香川県 団長 奥田和広

「ザァー」という音で目が覚めた。外は白みかけている。ここはクエゼリンだ。クエゼリンに来たのだと気が付いた。カーテンをあげて窓ごしに外を見るとすぐ海で何筋かの白い波頭が岸に打ち寄せている。いま聴えてくるのはその潮騒のひびきだった。時計を見るとまだ早い。眠られぬまま昨日一日のことからいろいろ思い出していた。

私の兄は昭和十七年秋に久里浜の海軍通信学校を出てその年の十一月か十二月初め頃かにこの島に来たらしい。その頃は最前線とはいえ大した緊迫感はなく平穏な明け暮れのように軍隊生活のことから島の様子特に珊瑚礁、椰子の話ときには花や貝の写生など描い

て戦地からとは思えない明るい便りがよく来た。又内地からの手紙を一番楽しみにしているようだった。それがいつ頃かブツリと途絶え一年以上も経った昭和二十年の四月のある日「昭和十九年二月六日南洋方面で戦死」という公報が入った。既に戦死して一年三月経っていた。

私達が、「横須賀局気付ウ丸〇ウー九」がクエゼリンであることを知ったのは終戦の翌年だった。その時いつか必ずクエゼリンに行かなければならないと思った。そして今回長年の願いが叶えられた。

成田を朝出発しサイパン、グアム、トラック、ポナペを経て午後十時三十分クエゼリンに着いた。

茫洋とした南太平洋の海や雲を見て三十数年前兄達はこの海域を通過してクエゼリンに向ったのだろうか。十時間余りの空の旅だったが何か無限の世界に向っている様な気がしてならなかった。

☆ ☆ ☆

島の西の端にある慰霊碑は夜来の雨に洗われ青い芝生と新しい白い柵に囲まれ私達を待ってくれているような気がした。

靖国神社の神霊、ご神饌、花、同行の山本さんが丹波の山から採って来た

という水、それぞれの故郷から持ってきた品々を霊前に供え香煙が流れるうち誰からか般若心経が唱えられた。胸が迫り熱いものが込み上げてくるのを抑えようがなかった。肉親の最期の模様を余り詳しく想像することは避けたい気もするが此処に立つて空と海近くに見えるエニブジ島からの集中砲撃を受け絶望的な状況の中でも日本の将来や故郷に想いを馳せたであろうと察しられる。この島の何処で斃れたかは知るよしもないが兄の短かかった人生の最後の一年余りを過した跡を偲びたいと思ふ暇があれば島内を歩いた。

海は透き通る様に碧く浜辺には浜屋顔が咲いていた。時折中天に鮮やかな虹がかかる。

現在目にするクエゼリンは公園のように美しい。道は舗装され送電線等は地下に敷設されているので白い建物と椰子が青空に映え見事なコントラストを見せている。島の西端の敵の上陸地点にあるトーチカ、最後の拠点となった北端の砲台跡、日本軍が造り現在も使われている棧橋位がわずかに戦の跡を止めている。

私達の宿舎は空港ターミナルから右へ少し行った所で裏は白い砂と珊瑚礁の海岸線が南北に伸びている。前にオーシャン道路と呼ばれる道があり前方は広いグラウンドとなって椰子の木立ちの間に教会、野外音楽堂、プール、テニスコート、球場等がある。その中央

辺りにかつての第六根拠地司令部があったそうだ。

第六十一警備隊と第六通信隊は隣接していた筈で私達は奇しくも兄の居た兵舎の近くで三日間を過した事になる。

☆ ☆ ☆

クエゼリンで逢った人達は本当に好い方ばかりだった。初対面でも古くからの知り合いの様な気になり遠慮もなくお願をしたり又いろいろとご好意に甘えた。

大里さんご夫妻、中田さん、徳原さん、ウイッテリー司令官、ホーランド少佐、アンブローズさん、タイマーさん、ウインフィールドさん、外戦前戦中とも日本人と一緒にだったという食堂の主人他数名の現地の人達から声をかけられた。大里さんは私達の三日間のスケジュールの総てを組んで下さり、ある時は中田さんと一緒に自分の車で島内をくまなく案内して下さいました。

司令部のホーランド少佐の好意でエビゼ島へも連れて行って貰ったしクラブでの晩餐会、最後の夜は大里さんの家のホームパーティに招かれご夫妻の手料理で中田さん、アンブローズさんご夫妻と夜が更けるのも忘れて歓談した。

この人達によって慰霊碑を肉親以上にお守り頂いていると思うと頭の下る思いがした。お別れを告げいよいよ帰る時も空港迄見送りに来られ、私達が

飛行機に乗り込んでも離陸迄長い間手を振り続けてくれた姿が今でも目から離れない。

飛行機はクエゼリンの上空を旋回し西へ向う。美しい自然に抱かれ今は安らかに眠る英霊にお別れを述べた。

「又来年も慰霊団が参りますよ。さようなら」

大阪 山田道子

一行の乗ったコンチネンタル64便が無事クエゼリンについたのは真夜中の十一時であった。安堵感と心細さの交錯するうち、大ぜいの出迎えをうけてロッヂに案内された。二時就寝。

八月一日午前六時、滝のようなスコールの音に目を覚ます。ダイナミックなのに驚く。七時大里様が車で迎えてきて下さる。雨に濡れながらゆっくりと気持よさそうに歩いている島の人々が羨ましい。数十日も雨がなかったのでこの雨は皆が喜んでいとのことであった。

午後、カラリと晴れ渡った青空の下、一同喪服に着換えて墓地に向った。白い柵の中の芝生はキレイに刈られ、雨で洗われた墓碑は美しく輝き嬉し涙で待ちわびているかに見えた。

日本から持ってきたお供ものの数々を供え、線香をあげてひざまづいた。

家族の写真を持って語りかける人、お経をあげる人、聖死は俗界を離れた心悦境となった。

大里様は島内くまなく案内して下さいました。近代的な施設設備は当然として、日本軍の作った栈橋が今尚使われているのは驚きであった。

小さな日本が米英を相手に広い大東亜各地で戦い、こんな遠い孤島まで立て派な栈橋を作り、汽車を走らせたという。すごいなあーと驚き、日本人の誇りを感じた。

クエゼリンの夕陽は美しい。真赤に燃えた太陽はヤシの間をみるみるうちに落ちてカメラが間に合わない。

夜、クラブでの会食のとき、憲兵隊長から、明日海からエビゼ島を見ませんかと言われ、予想しなかった幸せに一同感激する。

八月二日、墓前で記念撮影。午後二時エビゼ島行きの船に乗る。底知れぬ深い海の青さが神秘的でこわい位。点在する島々はお伽の国のように美しい。ドイツの軍艦が沈んでいるという所に、マストらしいものが見えた。

点在する島々は干潮時には陸つづきになるという。三十分程でエビゼに着いた。陸上の車は日本のものばかりで、今うるさい日本車問題が頭をかすめた。乗りこんできた人々は色鮮かなアロハ姿で、老いも若きも楽しそうに歌を歌ったりカードに興じたりしている。夜、ベッドに横たわり、昼間、司令官が一人一人と握手して下さいました。憲兵隊長が自らダイビングして日本の「アキバサン丸」から遺品を探し

て下さったこと、大里様のご招待での暖いお心遣いなどを思い、ここに来た幸せをかみしめた。

八月三日、今日は帰国の日。テレビも新聞もない、言葉も通じない孤島で三日間をどう過すか？。父の好きだった謡を姉と共に海に向って謡うつもりで謡本三冊用意してきたものの、スケジュールに合わせて行動するのが一杯で、あつという間に三日間が経っていった。

島民の踊りがあるというのでメインストリートで待った。さんさんと輝く太陽は肌をやき痛みを感じるが、ヤシの木陰に入ると涼しく爽やかなる。来賓席には司令官夫妻、酋長夫妻外の要人が見える。ギターの様な、マンドリンの様な楽器に女性のカン高い声、男性の低い太い声が程よく調和し、南国特有のハーモニーが響きわたる。と、帽子を冠って入口に行儀よく並んでいた女達は手に手に木の葉のうちわを持ち、若い男達は貝を連ねた鉢巻をして腰を振り振り、二列になり、三列になり輪になり踊り続ける。両手を上げたり下げたり飛行機が飛んでいるような型の単調な仕草の中にも小さきみに動かす手足の表情に、陽気な中に何となく愁いが感じられた。

やがて司令官夫人も踊るの輪に入った。一時間程で踊りは終わった。

機内の私どもは皆力の限りハンカチを振った。空港の外まで出てきて

手を振ってくれる姿は涙でかすみ、やがてブルーの環礁も小さくなって見えなくなつた。

藤沢市 内山 浅子

戦争が終つて三十五年目を迎えようとした昭和五十五年夏、奥田様を团长として、私たち一行八名はクエゼリンへ墓参の途につきました。

島に近づくとつれ戦争、そして父の面影が胸いっぱいひろがり、飛行機のタラップを下りるのも夢心地で、こみあげてくる涙をおさえるのがやっとでした。

父の戦死を知らされましたのは昭和十九年二月も半ば、部屋の前隅においたコタツにうづくまつて毎日毎日泣いていた母の姿が忘れられません。

父は、本部(トラック島)から視察のためにルオット(今はロイナムル)に出向いたとき攻撃にあい、本部からはすぐ潜水艦が迎えに来て下さったそうです。しかしここにとどまるからと言って愛用のカメラと時計をこつづけ、玉碎に加わつたということです。

遺品を届けて下さった方が『むりやりに艦に引きずりこんで御連れすればよかったのかも知れませんが武人として出来なかつた』と当時の様子をお話し下さいました。

このたび島で宿泊させて頂きましたおかげで、島の方からクエゼリンの最後の様子を一部始終お聞きすることが

出来ました。多分ルオットも同様だったと思います。一月三十一日に米軍の艦砲射撃がありその後上陸用舟艇で上陸、二月六日には、すっかり日本軍の人影がなくなつたということです。このお話をお聞きしたり、戦争の記事や写真ののせたパンフレットなどを見ますと、暑い炎天の下で歯をくいしばつて戦つて下さつた方々が偲ばれ胸がいたみました。

十八年の暮でした。父からの便りで軍属の方々が身にまとう下帯すらなくお国のために戦つていゝるが何とか一本でも多く送つてほしい。と母の許に便りがありました。当時私共は、横須賀に住んで居りましたので早速市長さんに御願ひして、婦人会の手で集めて頂く事になりました。着物の片袖をとつて作つたと思われくるめ緋や浴衣、そして白いさらし等色とりどりの下帯が九俵の炭俵にぎつしりだつたと母は申しております。その荷物が本部トラックに届きました時は、父は既に戦死し、後任の方からたしかに受取りましたという御礼状をいただきましたのをおぼえております。

碧い空と海、白い砂浜みどりの芝生と椰子の木、どちらを向いても一幅の絵になるような美しい島の光景ですが島の隅に、かつて日本軍が使い戦火をあびたトーチカが今もそのまま保存されておりますのを見ましたとき戦争の傷あとが生々しくはげしい戦いが目

のあたり見えるような気がしました。祖国を又肉親を思い戦場に散つてゆかれた英霊の名簿が収められてありませう墓地は、芝生もきれいに刈り込まれちり一つなく、現地の方々がいつも心にかけて清掃して下さるのには、有難いことと感激しました。

日本から持参しました水を碑にかけ、花を手向け般若心経をあげさせて頂き、霊やすかれと御いのりいたしました。

三日間の滞在中は大里様はじめ中田様基地の方々の御親切御心づくしは筆舌には尽せないもので、明るくさんざんと照る太陽の島、そして友情、クエゼリンへの墓参は私の生涯に貴重な父のプレゼントだつたような気がしました。

又来年もいらつしやい。とのかたい握手に又の機会をいゝる思いでお別れました。機内の窓からは見送りに来て下さつた方々の姿と、白いハンカチが目にしみ小さく小さくなってゆく島が名残惜しく心のお土産を胸いっぱいにくらませて帰つて参りました。

奥田様はじめ皆様がいゝ方で和やかな恙ない旅が出来ましたのも感謝でございます。

附記 戦地への通信先は、呉局気付テ二一テ一五という暗号でした。御心当りの方が居られればと思ひます。

神戸市 萩原八重子

浮田会長様の御尽力と、クエゼリン米軍基地司令官の格別な御厚意に依りまして、一生の念願として居りました慰霊碑へのお参りが叶い、亡き主人に代りまして、義父への供養が出来ました事をとて有難く存じました。三泊の間に、軍関係、現地二世の方々の御厚意に依りまして、慰霊碑には五たびもお連れ頂き、未だ墓参にお出でになれません方々の分迄心ゆくまで御冥福をお祈りさせて頂く事が出来ました。

義父は海軍第四工作隊の指揮官として、トラック島に本拠をおき、各島々へ視察に廻つて居ります時、たまたまクエゼリン環礁の中の、ルオット島に参りました翌日、玉碎致しましたと聞き及んで居りますが、現在は、ロイナムルと呼ばれ、重要なミサイルの研究段階にあります由にて、今はお連れ出来ない、と申されました。大変心残りでしたが、今は現地の方々の心からのお手入れの行届きました立派な碑のごさいますクエゼリンに参れましただけでも有難い事と存じ、いつの日にかは、ロイナムルにも行かせて頂ける日が参ります様に願つて居ります。

翌朝、基地の食堂で皆さんニコニコと迎えて下さり、多くの方が日本語で話しかけてこられ驚きました。食堂のマスター(クエゼリンの住民)が、玉碎の日迄、島に留まつて居られました

由、当時の日本軍の様子をお聞き出来ましたのは、何よりでございました。午後スクールで晴れました陽ざしのもと正式に慰霊碑にお連れ頂きました。

遙々日本より持って参りました会からの日本酒、タバコ等の御供物、夫々思い思いに、故人を偲びました好物の品等、墓前にお供えし、義姉が持参の父の正装の写真も飾らせて頂きました。義姉の唱えます般若心経に合せ深く深く御冥福を祈り、只々涙が止まりませんでした。

この椰子の木だけの小さな島での当時の激戦の様子を思いますと、胸の塞がる思いが致し、今尚各島には殆どの英霊が御遺骨が眠って居られる筈でございますが、今は皆様の御厚意に守られ、紺碧の海と南十字星の輝きまます空のもと、何卒安らかに眠り下さい、と祈るばかりでございました。

白い砂浜で、せめてもと、浜砂等採取して参りましたが、帰国後、義妹と共に、父のお墓に納めて参りました。

日中は誠に強い陽ざし乍ら、島内に茂ります椰子の木蔭に入りますと不思議に大変涼しく凌ぎ易くなります、椰子の実を味わってみたいと申しましたら、早速に大里様と中田様が固い殻を割り、中の実だけにして、沢山お届け下さいましたので、冷蔵庫に入れ、充分冷えましたところで、穴をあけ、グラスに注ぎますと、無色透明で口あたりのよい、うす甘いお汁で、一同大喜

び、美味しく頂きましたが日本に持ち帰れませんのが残念でございました。

大勢の方のお見送りを受けまして、帰国の途につきましたが、同行八名の方のことは勿論の事、現地の皆々様とも、初対面にもかかわらず、お親しく旧知の様なつながりを持たせて頂く事が出来たのは、何物にも替え難い喜びでございました。この感激、感銘は一生忘れ得ない事でございます。帰国後、皆々様に御礼状を差し上げましたら、中田様よりのお返事に、VIP (要人) 並みのお取り扱いを受けた事でもございました。

茲に再度、浮田会長様はじめ関係の皆様、クエゼリンの司令官以下、軍関係の方、二世の皆様方に、深甚なる御礼を申し上げさせて頂きます。

神戸市 小田桐温子

どの様な所か想像できないので多少不安はありましたが、成田を発って約十時間でクエゼリンに到着。大里様ご夫妻、中田様他大勢のお迎えをうけ、空港前のホテルに落ち着きました。

翌朝六時起床。まだ薄暗いが窓から波のうち寄せる外海が見える。すごいスクールでホテルから離れた食堂へ行くのでさえ大里様の車のお世話になった。食後雨の中を大里様の車で島内見学。墓前まで案内していただいたのにスクールの為、お参りすることが出来

ない。でもこの雨は飲料水となるので島では欠かせないとのこと。

午後一時、大里様、中田様に迎えに来ていただきお墓へお参りに行く。

それぞれの御供物をし、日本から持参したお酒、水などお墓にかけ、銘々心ゆくまでお参りすることが出来ました。ホテルまでの帰り、又島内見学をさせていただいた。日本軍の造った棧橋は今でも立派に役立っているし、鉄道の敷いてあった所や戦争の跡の地下壕も見ることができた。

海の色はそれはそれは美しく、この様なところでも信じられない。島内には高校まであり、周辺の島々の子弟も学んでいる様です。

夜クラブで会食があり楽しく過すことが出来ました。その時憲兵隊長が、エビゼ島行きをすすめて下さった。

次の日、大里様の車で司令官、憲兵隊長にご挨拶に行った。その時憲兵隊長から、御自身で潜水されて三井物産の秋葉山丸から引揚げられた空ビビン (ビール、サイダー) をいただいた。

その後又お墓参りをし島内見学。昨日入れなかつた場所へ今日は行ける様になっていた。写真も最初は撮るのをことわっていたのに、自由にさせていた。

午後一時、墓前で憲兵隊長と記念撮影をし、カメラマンのジャクソン様から航空写真をいただいた。

二時三十分、現地の人達と一緒に、エビゼ島行きの定期船に乗る。丁度干潮で、クエゼリンからエビゼまで陸続きになっている所が見られた。

ホテルに帰り、買物に出かける。食料品と衣料品などは別々のお店で、そこには一応何でも取り揃えてあり、日本製の置物、食器類、時計などあり、寿司海苔、かまぼこなどもありました。夜は大里様宅に招かれ楽しいひとときをすごすことが出来ました。

いよいよクエゼリンを去る日が来ました。今日は土曜日でお仕事もお休みです。九時からエビゼの人達のダンスを見物することが出来ました。酋長 (日本へ四回行った事がある) 夫妻、司令官ご夫妻と記念撮影をすることも出来、本当に楽しい日々を送り、美しく整備されたお墓にもお別れし、大勢のお見送りを受けて帰途に着きました。

三日の間、ご多用な大里様、中田様のつきっきりのお世話でお墓参りも何回も出来ましたし、アメリカの方々も現地の方々もとても友好的で、日本語の話せる現地の人は気軽に話しかけてこられたし、本当に楽しいままで父の腕の中にある様なやすらいだ気持ちの日間でした。と言いましても実は、私は父の腕を知らないのです。父が横須賀を出たのは十八年三月一日で、私はその三カ月後の六月三日に生れたので、私には腕を感じました。そして、浮田会

長様始め会の皆様が長い間かかって築かれた会の実績を私達の世代の者がみんな引ついでゆかねばならないと思いました。

兵庫県 山本 允子

長い間の念願が叶い、子供達と一緒にクエゼリン島にゆけたことは、まるで夢のようです。しかも慰霊碑の近くに三泊もできて只々ありがたく存じます。

着いた夜から朝にかけてひどい雨でしたが、島では長い間雨が降らないで困っていたところで、私共は雨と一しよに大そう歓迎されました。

雨がやみよい天気になったので、墓参にまいりました。広いキレイな芝生の中の、立派な碑を見て感無量。夫が二十八年間飲んでいた井戸水や、菓子、酒などをお供えし、手を合せて冥福を祈りました。内山様が心経を上げられましたのに合せ私も唱へました。

夫が出征の時は、長男隆一郎は二年五カ月、長女温子はまだ私の胎内にいきました。「三人揃ってお詣りに来ましたヨ。二人の子供がこんなに大きくなりましたヨ」と心の中で申しました。夫は無線通信事務官でしたから、第六通信隊に居たと思います。その通信隊のすぐ近くのホテルに三日も泊ることのできたのはほんとうにありがたいことでした。

島は夫の手紙の通り青い海、澄んだ

空、白い砂浜、高い椰子の夢の島でした。浜で小石や砂を袋に入れました。軍の秘密の島なのに三日も泊めて頂き、憲兵隊長様や大里様、中田様他大ぜいの方々に親身も及ばぬお世話になり感謝いたしております。子供達は、又来ますからと皆様に挨拶してしまいました。私もできたらもう一度来たいと思っていました。夢をみていたような三日間でした。

八月七日、夫の墓に、クエゼリンの砂と小石を納めました。

下田市 土屋まさ子

七月三十日、家を出る時は晴天でしたのに九段会館に着いた時は雨でした。皆様はもう元氣良く御揃いでいらっしやいました。翌三十一日七時出発。何となく不安と嬉しい複雑な気持ちで成田に向い、空の旅はきれいな空と海を見ながらその日のうちにクエゼリンに着きました。

八月一日の午後、雨のあがった空は澄みきって、海は青くヤシの木には実が一ぱい成っていました。

墓地には日本人墓地と書いてあり、写真で見覚えのある慰霊碑がきれいに清掃されて居りました。何時もこの様にきちんと掃除されて居るとの事、ほんとうにありがたいことです。

心静かにおまいりし、これで長い間の念願が叶えられ、何時主人の許に行ってもいいと思えました。

今度の墓参に、私は言葉がわからずご一しよした皆様に随分と御迷惑をかけ、又お世話様になりました。今度のことは一生涯私の脳裏から離れることはないでしょう。

島の皆様には思いもよらぬおもてなしを頂き、勿体なく思いました。こんなにして頂いてよいのだらうか。何故こんなにしてくれるのだらうかとも思いました。そしてみんな浮田会長さんのおかげだと思えました。

前にクエゼリンに行った人達はマジユロに泊って島の方々と楽しい交流があったと聞きました。私たちはマジユロに行けなかった替りにクエゼリンに泊ることができました。これも浮田さんのおかげと感謝して居ります。

島根県 山本隆一郎

今回の墓参にしましては、出発迄

◆ 恩 人 紹 介 ◆

お世話になった方々

会長 浮田 信 家

7月 フロイド・パーター氏

座間基地航空隊勤務、クエゼリン基地連絡官

8月 大統領 アマタ・カブア

マリーシャル諸島政府

本会の運営については各方面から格別の御協力をいただいておりますが昭和55年にも次の方々に大変お世話になった事を会員諸賢にご披露し、三氏に心からお礼を申しあげたいと思えます。
6月 ルッセル・イー・ホランド氏
米国防軍少佐、マリーシャル憲兵隊長

◆ 今年クエゼリンミサイル基地司令官の御交迭を承知するのがおそかった

ので墓参の願出がおくれ、6月23日に憲兵隊長殿からの許可書を受領し、それからスケジュールを組んだ。

許可書は「願出の8名は7月下旬乃至8月上旬墓参差支えない。本島での宿泊、食事差支えない。諸支払は米貨によること、本許可書言葉の違いで難解の点や、飛行機時間のこと、急用の事は座間基地のパーター連絡官(電話は云云)に直接連絡せられたい」という内容の大変詳細、親切なものであった。

早速パーター氏に連絡したところ、ホーランド氏とは、かつて米本土の同じ航空隊に勤務し、家族ぐるみの交際のある親友で、先年彼はクエゼリンにパーター氏は座間に来たこと。従ってクエゼリンの事も、墓や遺族達の墓参などは関心が薄い様子であった。7月1日写真、刷物等資料をもって官舎を訪問した。夫人は長野県出身の方とあ



フロイド・パーター夫妻

って、戦争のこと、墓のこと、遺族の心境にもお察しあり、御夫妻共誠実なご性格が手伝って私の説明をよく了解して下さいました。

従来の通りマジロ經由のつもりで準備したのがクエゼリン宿泊となったので司令部との応答も起ったが次々に解決し、31日朝予定通り成田空港発、同日午後10時過ぎ、憲兵隊代理アンブローズ氏、大里様夫妻、中田様等のお出迎えをいただいて無事クエゼリン空港に着いた。このような結果に終わったのも、ホーランド様、パーター様のお蔭と心から感謝しました。あとのお一人はアマタ・カブア様です。

昭和42年私達現地調査派遣員が、はじめてマジロを訪れたとき、マインシャル地区の行政長官はドワイトハイネ氏であったが、一方豪族アマタカブア氏は同地区第一のミニエコ汽船、ミニエコホテル等一流会社の社長として活躍され、且つマインシャル議会議長という要職に就いておられた。従って私等はまづこの御兩人に来島の目的を述べ御協力を願った。お二人共快く御納得下さい、なるべく早い時機にナウル行実現の期待も話題にのぼり社長夫人も加はる話も出た。初めてお目にかかってこんなに御協力下さったことにはいい知れぬ敬意を表したが、本年八月にはこのアマタ・カブア氏が今度はマインシャル諸島大統領という資格で閣僚と共に日本政府と打合のため来日され帝国ホテル

ルに止宿中の旨を聞いた。面会を求めたら、翌朝待つとの返事を得た。二、三日中に日本を去るといふ日程なのに昼までお話ができた。クエゼリンには本会の墓があり、現在米軍によって、鄭重に守られていること。クエゼリンがいつかは貴国に返されたら末永くお守り下さるよう心からお願ひした。アマタ・カブア大統領も深く頷づいて快諾された。

何年先か何十年先か、測るに由なき次第ではありますが英霊各位よ、米國管理のつづく限り、そしてマインシャルに返還されるときが来ても永久に安らかに眠り下さいとつけて帝国ホテル後にした。



左 保田昌宏氏次大統領夫妻
右 会長夫妻(帝国ホテルにて)

現地の便り

クエゼリンの山村 要様から浮田会長に寄せられた書簡二通を紹介いたします。長文なので要点だけをぬき書きしました。

※ 編集子

55・9・27 受信

浮田様・奥様には相変らず御元気で居られるとのことお喜び申し上げます。——山口良二様無事東京に着いて何よりでした。——クエゼリンの大里様、中田様、徳原様のお名前は、「環礁」で知っていましたが、お目にかかったのは始めてでした。皆良い人達でした。こういう方々がクエゼリンに居て下さってほんとうによかったと思いました。——憲兵隊長も特別に扱って便宜を計って下さいました。皆浮田様の御人徳と誠心によるものと深く感じ入りました。

アマタ・カブア大統領とゆっくりお話できた由、宜しうございました。——私は、気になっておることがあります。それは13年前に半年かけて浮田様と佐竹様が南洋を廻ったときのことです。ラリック、ラタック号(注、貨物船四三五トン)の待遇が非常に悪かったのですが、浮田様は一言の不平も言わず御苦勞をされているのを見て、頭が下がりました。私でさえ口に入られないまずい食物でも何も言わず

おあがりになり、ユプラの腐った臭さと、暑さと、身動きのできない狭い所に寝ているのを見て、帝国軍人の偉かったことをしみじみ感じました。今も時折り思い出してなつかしく、又すまなく思っています。

アマタ・カブア大統領も私と同じ思いたと思います。

カサイ君（注、カサイ・ノートマーシャル諸島政府資源開発大臣、山村様の三女の夫）は日系の親日家ですから、将来私共の世代がなくなっても大丈夫と思います。今後同じ世代の者同志で交際したらよいと思います。

山口良二様とクエゼリンのお墓にお詣りして、私が自分の目で直接見た日本人の忠誠心を思い出し涙がとまりませんでした。ウオッセ島での戦死者の墓を私の地所に建てたいと思っています。ウオッセの御遺族が何時でもお詣りに来られるようにします。

追伸 ミレ島に行ったグループは、昨日帰ってきました。明日出発してサipanに二泊し成田に帰るそうです。何もしてあげられずお気の毒に思います。今後こういう方々が来る時は、貴会を通じて御連絡頂くとよいと思います。そのときはお役に立ちたいと思っています。

55・10・3 受信

カサイ君の世代は、自分たちの地位も上り人間らしい生活ができるのは、体内に日本人の血が通っているからだ

と、言っています。—— 私たちの子供たち大抵いは、貴会の皆様と手を握り合ってゆくこと間違いないと信じています。カサイ君はハワイにゆき、十月三日に又東京に行くと言っています。私達の会のメンバーのタカオも一緒に行きます。

お体を大切にして御無理なさらず長生きをして下さいと、毎日神に祈っています。

会員の便り

藤沢市 内山浅子

秋晴れのさわやかな日々がつづいて居ります。先日は役員会の折に御邪魔申し上げまして、会を運営して下さいます皆様方の御苦勞の一端を伺い、感謝の念を一層深く致しました。

先々のこと、後継者云々の御話を伺いまして、帰宅してから娘にも話しました処、何か御手伝でも出来ませう事か御座いましたらと、申して居ります。クエゼリンの墓地が次の代、そして又次の代と、永遠にみたまが安らかに眠られますよう、おまもりが出来ませう願って居ります。 — 後略 —

東京都 山口裕子

この夏良二がマジユロに一人で行きたいと申しました時は、何とも不思議な感じで、自分でいろいろと連絡をと

ったり、準備をして居ります様子、若いうちにいろいろの経験をする事は結構な事ですからと、クエゼリンの墓参までは願わず、マジユロの方々、あの島、あの海はきつとよい経験になる事を祈って居りました。それが、浮田様の御親切な御尽力によって山村様の御同行にて再び良二がクエゼリンの墓参が出来まして、私共一同何と御礼申し上げます。よろしいやら本当に有難く感謝が一杯でございます。

山村様の御宅で御家族と御一緒に過させて頂き、一昨年の際とは違った島の生活はとてもよい勉強になった事と存じます。—— おかげ様で無事に南の旅もすみ、学校（注、大学院）に元気に精出して出かけて居ります。

マジユロ、クエゼリン一人旅

東京 山口良二

この夏思い切ってマジユロ、クエゼリンへの旅行へ行ってきました。78年夏以来2年ぶりのマジユロ、クエゼリンですが、青い空と海のすばらしさには変わりはありませんでした。

8月14日にコンチネタル航空で成田をたち、同日夜半マジユロに着き、以来10日間おなじみの山村要様宅にお世話になりました。浮田会長がクエゼリンへの入島許可を米軍当局へ申請して下さいまして、マジユロで入島許可を受けとり、8月26日にこの程運航を始めたマーシャル航空68便でクエゼリ

ンへ行きました。同地のホテル（クエゼリン・ロッジ）に一泊し、大里様、中田様、山村様と墓参をして8月27日に帰国致しました。

まずクエゼリンですが、今までは、滞在する事は非常に困難と想っておりましたが、米軍当局の御厚意と浮田会長の長年にわたる御努力により、同地に泊まる事ができました。墓所石碑はたいへんきれいに清掃されています。島内は一面に芝生が植えられ、マーシャルの島というよりもアメリカの一都市という感じでした。事実アメリカの一都市なのですが、自家用車が禁止されており、交通渋滞はありませんでした。現在クエゼリン島にはミサイルはなくレーダのみとの事でした。ミサイルは環礁内の他の島へ移転されたそうです。

今後も滞在が許可されれば、クエゼリンへの墓参が短期間に安い費用で行ける様になると思いますが、マジユロのみなさんは遺族会の墓参団がクエゼリンまで帰ってしまう事を大変心配しておられます。クエゼリンは水も電気も心配なく快適な滞在ですが、他のマーシャルの島とはまったくちがう島でして、南の島の実際の姿を見る事はできないと思います。マーシャル航空を利用してマジユロやアイリング・ラップなどの離島へ是非ともあわせて行く必要があると思いますが、マーシャル航空の運賃がけっこう高いのと、

座席数に限度がありますのでむずかしい事と思います。しかし私は、今後の計画立案に際してはマジュロや離島訪問を考慮していただきたいと思いません。これは山村様はじめマジュロのみな様よりきつく言いつかって来たことでもあります。

次にマジュロですが、山村様のお手紙の通りみな様お元気でして、日本の遺族会の方々にくれぐれもよろしくとの事でした。昨年末から年初にかけての水害は、死者こそないものの、大変大きなもので、相当の被害を与えています。8月の時点でも応急のテント暮しの方がまだ相当数おられまして、旧空港より新空港へ至る一kmぐらいの道の両側はまだびっしりとテントがたち並んでいました。津波によりめぐりとられた所はいまだに無残な姿のままです。当時の状況をいろいろ聞いてみました。経験のない事故ではつきりはしませんが、話を総合しますと、軒下浸水と堤防決壊と鉄砲水がいっしょになってやって来たという感じではないかと思います。水が上がりて来て腰あたりまで水につかり、波の直撃を受けた所では家が目の前を飛んでいったとの事でした。しかしながら被害は全地域にわたってというのではなく、かなりひどい所とそうでない所があります。これは島が彎曲している為と思われま

現在は相当復旧してほとんどの都市

機能は前にもどっています。水害の原凶等については今だに不明との事でした。

マジュロの方々は今年は水害で行けなくなってしまうが、来年は是非とも日本訪問を実現したいとの事でした。この次はもう少し手際よく行くとおっしゃっていました。

戦地からの便り

東京 林 春千代



(発信者) 林 大 大正5年生、海軍第一期兵科予備学生卒、クエゼリン島にて玉碎、第六通信隊附海軍大尉 28歳)

(第1信 18・5・12) ハガキ 予定通り三十日〇〇に到着致しました。航海中大分船酔いしましたが上陸して一晩立つと元氣も恢復致しました。ここで二三日飛行便を待つて目的地へ向います。全く暑いには閉口し

ます。併し目下雨季なので朝夕は楽なものですよ。信家の兄さん(註、浮田會長)の紹介で船でも非常に好都合でした。宜しく御伝え願います。

〇〇にて 大 ☆

(第2信 18・6・) ハガキ 其後御変わりありませんか。僕も元氣ですが一週間程前にととうとデンク熱に掛り一週間程ねました。これ丈は南洋の税金の様なもので仕方がないと思

います。時に幸代も居なくなり(註、妹が嫁いだことを知って)家も淋しい事でしょう。幸代は如何んな様子ですか、手紙位寄越すように置いて下さい。もう着任後一カ月経過しましたが未だ何処からも返事が来ません。それでも書く丈は五〇通位書いて居るんですから実に張合いがあります。では皆々様御体を大切に。

☆ ツイデの時「粉ワサビ」送られ度

(第3信 . . .) 便箋

父上始め母様からの御便り有難く頂戴致しました。皆々様元氣の由何よりです。小生も当方面の戦況に鑑みいやが上にも緊張した生活を送って居ます。併し、健康そのものですから御安心下さい。此の手紙と前後して長い便りがゆくとお思いますから詳しい事は今日は控えます。

恐らく此の手紙が着く頃は年も明けるか、明日、明後日と言う所と思いますが決戦下の正月は如何ですか。

兎に角戦地に居てつくづく考える事は、内地で働く生産陣の人達です。死にも狂ひで頑張ればそれ丈でいいと思います。理由等考える必要もない事です。その点等も充分認識してほしいと思う。軍人になる事丈が忠義の道ではありません。それは昔の戦争の事でしょう。まだ昔の様な考えでポヤポヤして居る人間が一人でも居たらピシシ説教する位の氣概が必要でしょう。

遊ぶ時に遊ぶ、それは決して不自由な戦地に居ても羨ましいと思いません。唯、頑張る時は頑張る、それ丈が生死を紙一重の境に置いて働く我々の心境です。今日の午後着任者があり、明、早朝副長が内地へ帰られるのであわててきたない便りを書きました。兄上その他の親族にも便りは致しませんからよろしく御伝え下さい。 二十五日夜 大 拜

△註、この便りの中の「長い便り」は遂に來なかつた。そして次の便りが絶筆になった。 ☆

(第4信 18・12・31) 便箋 謹賀新年

相変らず元氣ですが正月は丁度三十一日頃から下痢をして折角の御馳走も食べられませんでした。大好物の餅を (以下12頁2段目につづく)

昭和五十六年二月六日(金)

慰霊祭 六日

靖国神社

の御案内

直会旅行 六日・七日

三保の松原

明けましておめでとう御座います。

恒例の二月六日の行事について御案内申し上げます。

◎慰霊祭と定期総会

午前九時 受付開始、午前十時 慰霊祭、午前十一時 定期総会

靖国神社

◎九段会館に宿泊を希望される方は、宿泊月日、氏名、性別、年齢を書き、一月十日迄に料金を添えお申込み下さい。宿泊料は、一泊二食付で四、四〇〇円です。

◎直会旅行(六日・七日)

乗物 往復共大型観光バス、行先 三保の松原、日本平、登呂遺跡

宿泊 三保グランドホテル

電話 〇五四三―三四一〇―二二四

費用 小学生以上 一七、〇〇〇円(六日の昼食代、バス代、宿泊代、七日の昼食代、拝観料記念写真代共)

申込 一月十日迄に、氏名、住所、性別、年齢を記入し、料金を添えてお申込下さい。申込順に受付けて、一月十日又はその前でも、一〇〇名に達した時締切ります。

◎コース 二月六日(金)慰霊祭、総会が終了次第(正午頃の見込)バスは昼食弁当、お茶等を積みこんで靖国神社を出発します。

新日本三景の第一位に選ばれたという羽衣で知られた三保の松原、お茶とみかんと次郎長の清水港にまいます。そして今夜のお宿は三保の松原に程近い海辺の三保グランドホテルです。

例年に較べて一回り若くなった参加者に和気藹々の直会を期待して胸をはずませております。お国自慢の御披露がお楽しみ。

明くる二月七日(土)は先づは、ホテルに程近い東海大学博物館へ。世界唯一と言われるピグミー白長須鯨の標本や、三千尾の魚

海洋科の泳いでいる大水族館。海洋国家日本の行く途を教える教室

くれるでもあります。博物館を出ますと、伝説と謡曲に知られた

羽衣の松として秀嶺富士が存分に見られます。次は御存知清水次郎

長の墓のある梅蔭寺。そして、明治の文豪高山樗牛の墓所童華寺。

天然記念物の大蘇鉄やサボテン、さては見事な池泉観賞庭園の純和

風美を満喫し、日本平で、三六〇度のパノラマを目的保養に中食

を頂きます。登呂遺跡には古代人の堅穴式住居、高床式穀物倉庫が

復元されております。お帰りは、関西への方々のため静岡駅に立寄

り、清水インターから東名高速―東京駅―九段会館まで参ります。

順調に走って東京駅着は午後六時の見込みです。(A・O)

寄付者芳名

(敬称略)
(七四名)

本欄に掲載の会員各位は、年度会費御完納の上の御寄付であり
本会運営上寄与するところ多く役員一同いつも感謝申し上げます
いるところであります。一層節約を旨とし本務遂行に事欠かぬよ
う留意いたしますので今後共御協力いただき度御礼と共に御願
い申し上げます。
(昭和55年6月1日から昭和55年10月31日までに入金の方)

篤志会員その他

二二四九二 クエゼリン島

大里 清殿

香月 正紀殿

長谷川栄次殿

五五年現地墓団一同参

井上義 夫殿

川崎 文孝殿

小林 重雄殿

長谷川 博殿

村上 高吉殿

珊瑚 会殿

進藤 進殿

山地はま殿

北海道

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

兄 田村賢次郎

妻 安達智恵子

妹 岩川あい子

青森県

三〇〇〇〇

兄 池田 精治

母 小杉 リサ

岩手県

二〇〇〇〇

弟 伊勢 照男

妻 新田富美子

妻 小前 ミヤ

弟 淀川 元弘

栃木県

一〇〇〇〇

八〇〇〇
五〇〇〇
一〇〇〇

兄 後藤 行雄
妻 土屋まさ子
妹 石川 みち

京都府

一〇〇〇〇

中川 修

大阪府

一〇〇〇〇

父 栗原弥市郎

姉 中野フヂエ

鳥取県

五〇〇〇〇

妹 井上 照美

山口県

三〇〇〇〇

妻 内富みつゑ

徳島県

一〇〇〇〇

父 曾我井嘉平

母 奥田 マス

愛媛県

一〇〇〇〇

父 長岡 栄三

姉 鎌田ノブエ

高知県

一〇〇〇〇

妻 田中 百合

妻 近森 幸恵

福岡県

三〇〇〇〇

妻 一瀬クモエ

父 杉山 樹平

兄 一木 貞利

兄 小柳 顕義

母 花田はま子

妻 森 キヨ子

佐賀県

三〇〇〇〇

母 大串 キサ

長崎県

一〇〇〇〇

母 原田千三郎

妻 勝木ユリエ

妻 木下 貞子

宮崎県

八〇〇〇〇

母 土工アグリ

父 福留 通秋

父 曾我井嘉平

母 奥田 マス

父 長岡 栄三

姉 鎌田ノブエ

妻 田中 百合

妻 近森 幸恵

妻 一瀬クモエ

父 杉山 樹平

兄 一木 貞利

兄 小柳 顕義

母 花田はま子

妻 森 キヨ子

母 大串 キサ

妻 勝木ユリエ

妻 木下 貞子

父 土工アグリ

父 福留 通秋

